

好きで好きで好きです。

実嶋ユキ

幼なじみ

終業時間の17時半まであと10分というところで携帯が振動した。仕事の電話じゃなければいいと思いながら佐藤一樹はそっと携帯を開ける。

電話ではなくメールでタイトルは「今日の飲み会の場所」差出人は幼なじみの沢村千尋からだ。そういえば昨夜電話で話した時に飲み会に参加するよう言われたことを思い出した。「俺は学生じゃねーぞー」と小さくぼやきながら一樹は「了解」と短くレスを千尋に返した。

一樹と千尋は近所同士で生まれた年も病院も一緒といういわゆる幼なじみで、高校も一緒の公立高校だった。高校卒業後は一樹は就職し、千尋は大学に進学した。進む道が完全に分かれたことで離れるかと思ったが、千尋は「離れるのは寂しい！」と言って何かと一樹を連れ出している。入社して1年目は一樹も一杯一杯でなかなか誘いに乗れなかったが最近は少し余裕も出てきて千尋の誘いに乗れるようになった。千尋と一緒にいると楽しい。生まれた時からずっと一緒にいるせいか一樹にとって千尋は友人というより家族に近い。

引っ込み思案であまり人付き合いが上手ではない一樹とは対照的に、千尋は話が上手く、場を盛り上げてくれるので今も昔も宴会事には引っ張りだこだ。男から見てもかっこよく、おしゃれで頭も良く、面倒見のいい千尋は幼稚園の頃から一樹にとって自慢の幼なじみだった。

千尋にメールを返したら、丁度17時半になった。

「お先しまーす」

と小声で周りの者に言い、そそくさと会社の外に出た。

「会社出た。これから向かう」

とメールを千尋に送り、駅に向かった。

初めての告白

沢村千尋は佐藤一樹からのメールを見て決意を固めた。

一樹は物心ついた頃から一緒にいる千尋の幼なじみであり初恋の相手であり、本命であった。

初めて一樹に告白したのは幼稚園の時。お遊戯会の本番で千尋は一樹と一緒に踊る予定だった女の子から一樹を奪った。その女の子、確か真由美も一樹が大好きで「まゆはかずちゃんと結婚するの。」と幼稚園中に公言していたから、千尋は真由美をひどく憎んでいた。そして、お遊戯会では強引に一樹のパートナーになった真由美に対し、今考えれば幼稚園児とは思えないほどの殺意を抱き先生に抗議した。

「オレはどうして一樹と踊れないんだよー、女ばかりずるい！」

幼稚園の先生が

「ダンスは男の子と女の子がペアで踊るのよ〜。」

と苦笑して答えたのを覚えている。千尋はその時から幼稚園中の女の子を憎み、行動がかなり粗暴になった。今思えば嫉妬のあまり荒れたのだ。

先生の答えに納得がいかなかった千尋はお遊戯会当日の朝、一緒に幼稚園に行く一樹に告白した。

「オレは一樹が好きだから、今日は一樹と踊るからな！」

千尋はその時から一樹を好きと自覚はしていたが、真由美や他の女の子のように公言することはなかったので、千尋にとっては初めての告白だった。

一樹は当時からちょっとぼんやりというか抜けているというか鈍感だったから

「いいよ、僕は女の子の踊りも踊れるよ。まゆちゃん下手だから覚えちゃった。」

と屈託のない笑顔を見せて答えた。一樹にしてみれば千尋のいたずらに乗る程度、と軽く答えた一言だったと思うが、その答えを聞いた千尋は有頂天になった。

そして、千尋は本番でまんまとのペアの女の子を真由美につけさせ、一樹と踊った。親と先生と真由美には怒られたが、その時のビデオは今でも宝物で、こっそりDVDに焼き直して永久保存版にしている。

二度目の告白

千尋の二度目の告白は中学の時。反抗期真っ只中の千尋は部活も行かなくなり家にいるのも嫌で、学校が終われば専ら一樹の部屋に入り浸っていた。

「一樹～今日泊まっていい？」

千尋は読書をしている一樹に声をかけた。一樹は読んでいる本から目を外し千尋を見た。一樹は小学校高学年位から目が悪くなり、中学に入ってから眼鏡をかけていた。

「だめだよ。俺がおばさんに怒られる。」

中学に入って、元々口数の少ない一樹はますます言葉が少なくなった。「うちの子も反抗期でぜんぜんしゃべらないの。」と一樹の母親が千尋の母親に愚痴っているのを何度か耳にしたことがある。

「なんだよ、関係ねーじゃん。」

千尋は面白くなくて、一樹から本を取り上げた。

「やめろよ、追い出すぞ。」

一樹は千尋から本を奪い返した。

「何だよ、ちっちょ頃はちーちゃん、ちーちゃんって、いつでも俺の味方してくれてたのに。」

千尋はふてくされた。そんな千尋を見て、一樹はため息をつく。

「いつの話をしているんだよ。」

一樹は本を床に置き、眠そうな顔で眼鏡を外した。

「もう眠い。千尋も帰れよ。」

気付いたら11時だった。一樹は座っていた床からベッドに移動し横になった。Tシャツにハーフパンツで横たわる、その無防備な一樹の姿に千尋はドキドキした。一樹が横たわるそのベッドに背中をくっつけ、一樹を見ないようにした。衝動的に抱きしめたくなくなってしまいそうだったからだ。

「一樹、高校どこにするの？」

真面目な話なら食いついてくるかと千尋は一樹に尋ねた。一樹はしばらく無言だったが、

「俺は北高に行くよ。」

とつぶやくように言った。

北高は地元の公立高校だ。一樹のレベルだったら余裕で行ける。

「北高か、」

一樹の一言で千尋は自分の進路を決めた。進路の先生や親からずっと高校はどこにするんだと言われ続けてきたが、一樹が北高に行くなら自分も北高にする。そう決めた。

しばらくして、一樹の寝息が聞こえてきた。千尋はその寝顔を振り返ってそっと見る。一樹は同年代の子比べると小柄で体も華奢なため、男らしさを感じさせない。顔立ちも母親に似たせいか線が細く、パッと見は男か女かわからない中性的な容貌をしている。千尋はそれが長年一樹が抱いているコンプレックスとわかっているので本人の前では容姿には一切触れないが、一樹のそんな顔を覚えていない程昔からずっとかわいくてしょうがないと思っている。

「一樹、俺らはずっと一緒にいような。」

千尋の告白にも一樹は起きない。規則正しい寝息を立てて熟睡しているようだ。千尋はそれを確認して告白を続けた。

「俺、一樹が好きなんだよ。やっぱり。」

千尋は完全に振り返って寝ている一樹を見る。

「俺、ウザイよな。嫌われるのも怖い。」

こんなに近いのに届かない。千尋はそんな思いをずっと抱いていた。男が男を好きなのは「普通」ではないと知ったのは小学校低学年の頃だったか。少し距離を置いた方がいいのかもと思ったこともある。このまま直球で想い続けたら一樹に迷惑をかける可能性がある。今までは一樹に対する想いが強すぎて周りが見えなかった。

「一樹とずっと一緒にいるために俺は少し大人になるよ。」

千尋は帰るために立ち上がって熟睡している一樹の顔を見た。見ているだけは足りず顔を近づけた。しんと静まる部屋に一樹の寝息と千尋の心音が響く。千尋はそっと一樹の髪に触れて少し長い前髪を分けた。開かれた白い額に思わず口付けようとしたが、一樹が目を覚ますのを恐れその額を指でそっと撫でた。つるつとしたその感触が気持ちよくて、2、3度ゆっくり撫でた。

「明日から大人になるから。約束する。」

そう言って千尋はもう一度指でそっと一樹の額を撫でた。

「キスしてえ。」

その指を額から強すぎないようにそっとゆっくり一樹の唇まで移動する。己の指を唇に見立て、薄く開いた一樹の桜色の唇を少し強く押した。

「ファーストキスGET！」

小声でつぶやき、名残惜しげに指を一樹の唇から離れた。

「おやすみ一樹。」

とりあえず今はこれでいい。千尋は己を納得させた。

高校に入ってから千尋と一樹は少し離れた。千尋は中学の時に放り投げたバスケットを再び始め、一樹はファーストフード店でバイトを始めた。それぞれに友人ができ、一緒にいる時間は自然と減った。学校ですれ違ったり、専攻の授業が一緒になったときは声をかけあっていたが、以前のように一樹の後を千尋が追うことはなかった。中学の時から一緒にいた同級生は「ケンカでもしたのか？」とびっくりするほどだった。

大人になることがこんなに苦しいことだとは千尋は考えてなかった。一樹が自分以外の男や女としゃべって笑っているその姿を見たくなくて、同じ高校に入ったことを後悔したのは入学早々だった。嫉妬という醜い感情を殺すために千尋はバスケットに打ち込んだ。そのせいか、千尋には「クールでストイックなスポーツマン」というイメージが出来上がってた。元々運動神経は良いし、中学から伸び続けていた身長は180cmを超え、その大きな体は重宝がられてレギュラーを取れるようにまでなった。もちろん一樹に対する愛情が失せたわけではない。曇ることなく一樹を想い続け、アンテナを常に張り一樹の動向をチェックしていた。

ある時、千尋は一樹が携帯を持っているとらしいという噂を小耳に挟んだ。そのことを真っ先に自分に報告しない一樹に、なぜかものすごく腹が立ち、授業が終わるのを待ち伏せした。

「千尋、どうかした？誰かに用？」

一樹はすぐに千尋に気付いた。1年生ながらにバスケット部で頭角を現している千尋は既に有名人で、千尋が通れば女子がキャーキャー騒いでいた。

「一樹携帯持ってるんだって？いつからだよ。」

千尋の睨むような眼差しに一樹は首をかしげた。高校に入ってから千尋は一樹にあまり絡んでこなかったから、あえて伝える必要もないかと思っていたし、携帯はバイトで遅くなるときに家族にかける為に持たされたもので、一樹自身はそれほど使用していなかった。

「最近だよ。バイトで遅くなったときに家に電話しているだけ。」

一樹はなんだか浮気を責められている気持ちになった。千尋の雰囲気はそれほど剣呑としていた。校内では「携帯所持」＝「彼女」or「彼氏」ができたという構図が出来上がっていて、千尋も誤解しているのだろう。別に悪いことをしているわけではないのに、悪いことをしてしまった気になり、千尋の顔色を伺った。

「番号は？」

千尋は硬い表情のまま一樹に聞いた。久々に近距離で話した一樹は相変わらずかわいらしく、千尋が大きくなったせいか、一樹がますます小さく思えた。それを言うと一樹の機嫌が急降下するため黙っていたが。

「何だよ、えらそうだな～」

ブツブツ言いながらも一樹は携帯番号を紙に書いて渡した。

「他の奴にも番号教えてないし、見つかったらやばいから言うなよ。」

一樹は千尋に念を押した。

「他の奴に言ってねえの？」

千尋は喜びを隠せずに聞き直した。

「言わないよ。バレて没収されるの嫌だし。だから頼むよ。」

バイトは親と学校の許可を取ればしてもいいことになっていたが、携帯電話の所持は禁止されていた。見つかったら即没収。厳しい校則だった。

「言わねえけど、一樹が携帯持ってんのバレてるぞ。気をつけろよ。俺も人づてに聞いたし。」

千尋の忠告に一樹は「マジかよ〜」とうなだれた。

その日は何となく一緒に帰ることになった。一樹はバイトはないというので、千尋は部活をサボった。

「久しぶりだな、千尋と帰るの。」

一樹は何となく嬉しそうだった。

「俺と帰れて嬉しい？」

思わず聞いてしまって、直後に千尋は後悔した。ウザイ自分を封印したのに、またすぐに復活しそうな、暴走しそうな自分が怖かった。しばらくの沈黙のあと、

「嬉しいよ。」

と一樹は答えた。千尋は思わず立ち止まってしまった。

「なんだよ、そんなに驚くなよ。」

一樹は照れたように笑った。

「なんかさ、高校入ってから千尋は俺を無視するから、俺何かやったかと思ってずっと気になってたんだ。でも気付いた時には千尋は遠い存在になっててさ、俺からは声かけられなくて。」

一樹は控え目で大人しいからこちらからアクションを起こさないと動かない。そんな性格で友達ができるのかと千尋は心配したが杞憂に終わった。一樹はその容姿と性格で女子の間では密かに「癒し系アイドル」として人気が高く、一樹の周りには男女問わず常に人がいた。千尋から見れば、一樹も遠い存在になっていた。

「無視してたわけじゃねえけど、中学の時、ベタベタしすぎて周りから気持ち悪がられていたから一樹が迷惑してるんじゃないかと思って。」

最後の方はボソボソ声になった。

「家に入り浸られたのは正直ちょっと迷惑だったこともあったけど、」

一樹の言葉に「そりゃそうだよな」と千尋は思った。ほとんど毎日のように一樹の家に押しかけていた。

「家も親の離婚とかあったし、俺もなんかイライラして千尋を避けちゃったこともあったし、」

一樹の両親は一樹が中3の時に離婚した。一樹が高校に入るまでは離婚しないという話もあったらしいが、一樹の母親は我慢ができなかったらしく一樹の中学卒業目前で正式に離婚した。一樹の父親は中学1年くらいから姿を見せなくなって、その事を一樹に聞いたら「別居してる」と淡々と答えたのを覚えている。

「でも千尋と居て、俺は楽しかったよ。家の中が最悪な時にいろいろ連れて行ってくれたりしてくれて、実はちょっと感謝してた。」

一樹は一気に言った。ずっと千尋に言いたかった言葉がようやく言えた。その思いで一杯だった。

そんな一樹の言葉を受けて、千尋が正気でいられるはずもなかった。一樹を抱きしめるために思わず伸ばした手は、以前は届かなかったのに背が大きくなったせいか余裕で一樹の肩に到達した。

「ん？」

肩に手を置かれ、一樹は千尋を振り返った。

「俺も携帯買う。」

一樹にかける適当な言葉が見つからなくて、千尋は思わずそんなことを口走っていた。

「何だよそれ？」

一樹は千尋の言葉の意味がわからず首をかしげる。

「メールだったらいいよな、俺もなんか色々あるから、たまには愚痴聞いてくれよ。」

とっさに言った千尋の言葉に一樹な納得したようだった。千尋の手はまだ一樹の肩に置かれたままで、一樹は千尋を見上げた。

「しかし、デカくなったよなあ～千尋は。」

「一樹は変わらねえな。」

「なんだよー。もう行くぞ！」

一樹はムツとした表情を見せてスタスタ歩き出した。一樹のコンプレックスは相変わらずのようだ。それをコンプレックスに思っている一樹をかわいいと本人に言えないのが残念で苦しい。

「一樹待てよ、久々なんだからゆっくり帰ろうぜ。」

千尋は一樹を追いかけ、再び横に並んだ。そしてその後、家路に着くまでクラスや担任、部活やバイトのこと、友人、家のことなどたくさん話した。

その数日後、千尋は親を説得して型落ちの携帯電話を手に入れた。一樹に会えば触れたくなくなってしまうためメールや通話をすることで欲望を抑えた。千尋と一樹は今までのぎこちない関係から比べると格段にいい関係になった。

一樹との関係性が良くなったのと比例して、千尋は人当たりが良くなった。今までのクールな仮面が剥がれ、千尋の本来の明るさや人付き合いの良さが前面に出てきた。中学からの友人の数人は「中学の頃に戻っただけ」「反抗期の終了」などと言っていたが、多くは「彼女が出来た！」と推測し、あっという間に噂になった。千尋がいくら否定しても「沢村千尋に彼女が出来た説」は収まらず、間もなく携帯電話を所持しているのも周囲に知られることになり噂は一気に信憑性を増した。当然噂は一樹の耳にも入った。

「彼女出来たんだって？」

と携帯電話を通して無邪気に聞いてきた一樹に、

「人の気も知らねえで。」

と唸った。

「千尋は人気があるからしょうがないよ。」

一樹の見当違いな答えに、千尋は一樹が千尋の想いを1mmも理解していないことを痛感した。その後も一樹の何気ない一言が千尋の胸に突き刺さることがあり、千尋の悩む日々が続いた。

「何してる？」

土曜日の朝、何もすることがなくて、何気なく千尋は一樹に携帯メールを送った。前夜というか、朝3時までゲームをやっていたので頭はぼーっとしていたのだが、そのぼーっとした頭が一樹を求めていた。

高2になって、周りは進路、進路で遊びもままならなくなった。千尋は進学する予定で志望の大学には一応問題ないということで、他より少し余裕があった。周りが遊んでくれないのでゲーセンに行くことは減り、専ら家でゲームをしていた。

一樹は進路で少し悩んでいるようで、何度も進路指導の先生と進路指導室に入る姿を見かけた。一樹の家は親が離婚して、経済的に少し厳しいと千尋の母親が言っていた。

「これから買い物に行こうかと思ってる。」

すぐに一樹からメールのレスが来た。千尋は一樹がどこに買い物に行くのか興味を持った。仲のいい同級生と一緒にゲーセンや、カラオケ、ボーリングには行くが、買い物にはあまり行かない。

千尋は一樹に電話をかけた。一樹はすぐに出た。

「今日、バイトねえの？」

「あったんだけど、急遽交代。」

「昨日急に言われちゃって、休日に空くなんてラッキーだけども。」

と一樹は嬉しそうに話した。

家計を助けるためなのか、一樹は忙しい高校生活を送っている。平日も3日はバイトをしていて、週末もだいたい入っている。そのせいか学業成績は芳しくなかったが。

「俺も行っている？」

なるべくサラリと言うように千尋は心掛けた。本当は緊張のあまり心臓がドキドキしていた。考えてみれば二人だけで出かけるのは初めてだ。家が近いから学校には一緒に行っている。帰りは千尋は部活、一樹はバイトなのでバラバラだ。一樹と一緒にいられる時間が少ない。千尋は常々そう思っていた。電話やメールだけでは足りない。絶対に足りない。学校の行き帰りが一緒なのと、買い物に一緒に行くのは全く違う。期待で千尋の心臓はバクバク言っていた。

「いいよ。でも遠くは行かないよ。」

一樹はあっさりとして千尋の同行を許可した。千尋は心の中で大きくガッツポーズをし、なるべく平静を装って言った。

「すぐ着替えてそっちに行く。」

自転車で一樹の家に行くと、一樹も自転車を出して千尋を待っていた。千尋と一樹の家は自転車で3分とかからない距離に住んでいる。母親学級も一緒に生まれた病院も一緒だったから、千尋の母親と一樹の母親は仲が良い。

「千尋も暇人だなー。」

笑う一樹がまぶしくて、千尋は少し目線を逸らした。

「どこ行く？」

なんだか急に照れくさくなった千尋が少しぶっきらぼうに言った。一樹はそんな態度の千尋に少し戸惑ったが、からかわれたのが面白くなかったのだろうと気にしないことにした。

「んーせっかくだから、トレスに行くか？」

トレスは一年前に出来た郊外型の大規模ショッピングモールだ。一日潰せるくらいの大きさと数百もの専門店が入っている。一樹は一日中自分といてくれる気なんだろうか、と千尋は期待と喜びに顔が緩んだ。

「トレスいいな。遊べるし、映画も見れるじゃん。」

「映画みるの？じゃ、学生証一応持ってくか。」

一樹は一旦家の中に戻った。玄関先で

「千尋とトレスに行ってくる。」

と一樹にしては大きい声で家人に伝えていた。千尋はしっかり学生証を持ってきていた。これさえあれば映画もボーリングもカラオケも学生割引で入れる無敵のパスポートだ。

ショッピングモール・トレスは自転車で20分ほどのところにある。駐輪場に自転車を置いて、トレスの東口から店に入る。一樹の目的の文房具店が一番近い入り口だ。

「俺、文房具の店行くけど、千尋はどうする？」

一樹が千尋に尋ねる。千尋は一樹と離れる気はさらさらないので、

「俺もノート見たい。」

と言って千尋についていく。

「俺さ、文房具好きなんだ。俺は進学しないつもりだから今文房具メーカーで就職先探しているんだけど、難しくて。」

少し立ち止まった一樹にさらりと言われ、千尋は衝撃を受けた。千尋は一樹はてっきり進学するのかと思っていた。一緒の学校とは言わないまでも、一緒に学生生活を楽しめる、とそう思い込んでいた。一樹が就職をしたら会う時間が少なくなってしまう。千尋は背筋がずっと寒くなるのを感じた。

「俺頭悪いから進学は無理だし、家にはそんな金もないしさ。就職して少し稼がないと。」

そんな千尋の衝撃を知ってか知らずか、一樹は言葉を続け、真面目な話をしたのが恥ずかしかったのか、顔を赤くして照れながらお気に入りの文房具のコーナーへ逃げるように消えていった。

残された千尋はしばらく立ち尽くしてしまった。それくらい一樹の「就職」という道は今後の二人を大きく分けてしまうと思込んでしまった。どうすればいい、と千尋は考えた。どうすれば一樹との関係を繋ぎ止められるのか、もう映画も買い物もどうでもよくなって、文房具で一樹が何を買ったのか、流れで入った映画館も、話題の映画でせっかく一樹と二人っきりで見られたのに、内容が頭に入ってこなかった。

すっかり黙りこんでしまった千尋を一樹は心配した。

「千尋、調子悪いのか？」

映画が終わった後、一樹は千尋の顔を若干見上げる形で千尋に聞いてきた。一樹は千尋の頭一つ分小さい。

「いや、ちょっと、」

千尋は一樹から目を逸らした。色々な想いが爆発して独占欲にかられた千尋は一樹をまともに見ることができなかった。まともに見れば「どこにも行くな。」と言ってしまいそうで。

「もう帰るか？俺はもう終わったから。千尋が良ければだけど。」

「あ、そうだな。いや、、、」

「どっか寄るか？俺は大丈夫だけど。」

一樹の罪のないやさしさが千尋には嬉しいのと同時にツライ。

「、、、じゃあ、ちょっと座りたい。」

「何だよ、疲れたのか？そんなデカイ図体して。」

一樹は笑いながら空いている椅子を探した。大型ショッピングモールは店に入らなくても至るところに椅子があるが、大抵大人と子供で埋まっている。一樹が二人で座れそうな椅子を探している間、千尋は気を落ち着かせた。一樹の軽口にも突っ込む余裕はなかった。

一生の別れであるわけじゃない、ただ、進路が違うだけ、自由に会える時間が少し減るだけだ、少し冷静になれ！と心の中で言い続けた。

「千尋、何か飲むか？」

一樹が黙り込んで、若干顔色が悪いというか表情のない千尋を気遣った。椅子はなかなか見つからず、結局トイレに近い椅子に座ることになった。

「じゃあ、コーラ頼む。」

千尋は一樹に小銭を渡した。炭酸でも飲んで心を落ち着かせるしかない。千尋はそう思った。

「ん。」

千尋の親指と人差し指が一樹の手の平に触れ、小銭が千尋の指から一樹の手の平に落ちる。千尋の手の平よりはるかに小さい一樹の手の平が無償にかわいらしく、千尋を思わず一樹の手の平を小銭ごと握らせるように上から手を被せ握った。一樹は驚いたのか、少しビクッと動いた。

「落とすなよ。」

千尋は努めて冷静に言った。本当は自分の大胆な行動に驚いて、急に背中からジワリと汗が出てきたが。

「何だよ、子供扱いして！」

一樹は拗ねたように、小銭を握り締めて千尋の手を払った。

「コーンスープ買ってやるからな！」

一樹は歩いて数十歩足らずの自販機の前に立った。自分は何を買うか迷っているようだった。自販機は3台あって、少し優柔不断な所がある一樹は即決はできないようだった。

千尋は一樹の手を握った右手を見て、もう一度一樹の手を思い出し握る。ずっと、この手の中に一樹の手があればいいのに。そう思ってもう一度強く握った。

「はい。」

一樹はちゃんとコーラを買ってくれた。

「サンキュ。」

千尋はお礼を言って、一樹からコーラを受け取った。すぐに蓋を開け、一気に口に流し込む。コーラの冷たさと辛口の炭酸が千尋の心と頭を少し冷ましてくれる気がした。

「一気に飲むと、腹壊すぞ。」

先程の応酬なのか、一樹が千尋を見てニヤニヤ笑った。そんな一樹の表情も千尋は好きだ。普段、学校の中では見せない表情で、自分だけに見せてくれると思っているから。

「一樹はお茶か、渋いな。」

コーラのおかげで少し余裕の出た千尋は軽口を叩いた。

「俺は千尋と違って大人なんだよ。」

一樹も千尋の軽口に少し安心したのか、千尋の横に座ってお茶の蓋を取り、口に入れた。一樹

の動く喉仏を千尋は目で追った。一樹の色白の喉を動く喉仏に欲情する自分は、やはり一樹を恋愛対象として見ていて、欲望の対象として見ている。千尋は改めてそう自覚した。学校でモーションかけてくるマセた女子たちでもなく、雑誌のグラビアアイドルや友達とこっそり見たAVの女優でもなく、一樹に欲情している。中学の時にクラスメイトと研究した自慰行為も、浮かぶのは彼女たちではなく一樹だった。

「就職しても、一緒に遊ぼうな。」

コーラを更に一口飲んで、やっと言えた一言だが、千尋は消化不良だった。何か、もっと一樹と自分を繋ぎ止める言葉が欲しい。そう思った。

「そうだな。今のところ家からは出る予定はないんだ。第一希望の就職先はちょっと遠いけど通えるし。もし入れたらだけどさ。」

少なくとも一樹は引っ越す気はないらしい。その言葉に千尋はほっとした。

「俺は一樹とずっと一緒にいたい。」

「え？」

千尋の突然の告白に一樹は驚いて聞き返した。一番驚いたのは千尋だ。ほっとした拍子に思わず想いが口からこぼれてしまった。急いでコーラを再び口に流し込む。

「俺たち、幼稚園からずっと一緒だぜ。急に離れるのは寂しいだろ。」

千尋は早口でそう言って、照れ隠しにコーラを再び口にする。口が渴いて仕方がない。一樹の反応が怖くて一樹の顔はとても見れず、ひたすらコーラを流し込んだ。

「千尋は大げさだなー。」

一樹は笑った。そして、千尋の腿を軽く2、3度叩いた。

「大丈夫。仕事とかで今より会えなくなるかもしれないけど、ちゃんと連絡は取り合おう。」

一樹の千尋の想いとはちょっとずれた言葉が、千尋には嬉しくもあり、悲しい。千尋自ら軸を逸らしたせいもあるのだが、千尋の想いは一樹の想いの層を突き抜けている。一樹は純粹に友情、千尋は欲望も伴った愛情。向きは同じでも行き先は違う。

「千尋は意外と寂しがり屋だったんだな。俺知らなかったよ。」

一樹は少し優越感を持って千尋に言った。自分よりもずっと大人だと思っていた千尋が子供っぽいことを言うので、そんな千尋がなんだかかわいいと一樹は思った。

「言ってるよ。一樹だって俺がいなくなったら寂しくなるぜ。」

千尋は一人優越感に浸る一樹が面白くなって思わず言い放った。

「、、、そうかもな。」

千尋の言葉に一樹は一瞬詰まった。

「そうだな、やっぱり寂しいな。」

一樹はお茶の入ったペットボトルを軽く揺すった。

「千尋は俺にとって家族も同然だし、あまりに長くいて離れることって考えてなかったけど、やっぱり離れるって考えると寂しいな。」

うんうん、と一樹は頷いて言った。

「千尋こそ、俺が就職しても離れないでくれよ。」

たとえ友情からくる言葉でも、千尋は嬉しかった。心がジンとして一樹が発したその言葉を録音しておけば良かったと何度も後悔するほど嬉しかった。

「俺は、、、離れない。」

千尋はそう言い、残ったコーラを飲み干して、立ち上がった。コーラの入っていたペットボト

ルをごみ箱に投げ捨て、そのままトイレに入った。

「絶対に離れない。」

トイレの個室に入って便座に座った千尋はそうつぶやいて、千尋は流れる涙をトイレットペーパーで拭いた。涙はしばらく止まらなかった。

「幸せだけどツレえ。」

千尋は一樹の手を握った右手を、一樹の手の感触を思い出して握る。

「ツレえ。」

しばらくして出てきた千尋に、一樹は

「やっぱり腹壊したんだろ。」

と軽口を叩きながらも心配そうに聞いてきた。

「そういうこと言うなよ、デリカシーがねえな。」

トイレから戻った千尋は一樹に対し冷静に対応できた。もどかしい想いを涙を流すことで少し相殺できたのかもしれない。千尋はそう思うことにした。涙が出るなんて千尋自身びっくりしたが、少しすっきりしたのは事実だ。

「またな。」

別れ際、一樹の家の前で一樹が千尋に言った。

「おう。また月曜日な。」

千尋は努めて軽く返した。明日の日曜日、一樹はバイトが入っている。これ以上贅沢は言えない。

「今日は楽しかったよ。ありがと。」

一樹は笑顔でそう言って、手を振った。その笑顔に顔が緩むのを抑えつつ、千尋は手をあげた。

「じゃな。」

そして、自転車のペダルに足を乗せ一気に漕いだ。

漕いだペダルは軽かった。

目標

一樹が就職して最初の日、千尋も入学式だった。

学部長が「これからのことを考えて行動しなさい」と言っていた。他はほとんど耳に入らなかったが、この言葉だけは耳に入ってきた。千尋は延々と続く主賓やら何やらの言葉は聞き流して、これからの一樹とのことを考えた。

今後いつかは一樹に告白する。その後はどうするか。もし千尋の想いが成就すれば、やはり一樹と一緒に暮らしたい。そのためには金を貯める必要がある。千尋はにぎやか過ぎるサークルのスカウトの声も入らずひたすら一樹との生活をシュミレーションしていた。告白が失敗に終わる可能性は全く考えなかった。

千尋は昼過ぎに一樹にメールをした。

「初日おつかれ。どうだった？これから頑張れよ。」

というシンプルな文章。聞きたいことは山ほどあった。例えば隣の席は男か女か、千尋はどちらも嫌だった。同僚はやさしそうか、上司はどんな人か、残業はありそうか、ひっくるめて職場環境は良さそうか、全部聞きたかった。しかし、いつもは1時間以内には帰ってくるメールの返信がなかなか帰ってこなかった。初日だからと千尋は己を納得させていたが、夜の10時になってもメールの返信はなかった。

夜11時を過ぎて、一樹からメールが入った。

「早速歓迎会があった。”ひとこと”言わされて緊張した。頑張るよ。」

その「歓迎会」という文字に千尋は動揺した。もちろん未成年だから飲まされているわけではないと思うが、一樹の酒の入った姿を想像してしまった。色の白い一樹は酒が入ると赤くなり、たぶんそんなに強くない。妄想は膨らみ、酔った一樹を誰かが送るという図が浮かんだが、すぐに打ち消した。本人に確かめればいい。千尋はすぐに一樹に電話をした。

3回程のコールで一樹は出た。

「大丈夫か？飲まされてないか？」

一樹が話し出すのを待てず、通話が繋がったとたん千尋は一樹に聞いた。

「大丈夫だよ。俺は飲んでない。飲まされそうになったけど、必死で断ったよ。」

一樹は少し笑って言った。

「千尋は心配症だなあ。」

千尋は一樹の言葉にひとまず安心した。

「一樹が潰れてんじゃねえか気になっただけ。酒飲まされて死んだ奴とかいるし。」

「そうだな。少なくとも無理矢理飲ます人はいなかった。」

千尋は心底安心した。

「会社、どんな雰囲気だった？」

「うん。月末月初は忙しくて残業けっこうあるって俺のトレーナーが言っていた。」

「トレーナーって何だよ。ジムのトレーナーみたいな感じか？」

「ん、教育係だな。1年はついてくれるらしい。社員教育はちゃんとしている会社みたいで安心した。あと事務用品扱う会社だけにやっぱり女の子多かったよ。」

最後の言葉、一樹は少し嬉しそうに言った。千尋にはそう聞こえた。一樹は女を好きになる普通のごく一般的な男だ。その事実が棘のように千尋の心に突き刺さった。

千尋は一樹を本当に好きだと自覚してから色々と調べて情報を収集した。例えば一樹のように普通に女が好きな男をノンケ。千尋のように男が好きな男をゲイ。男も女も好きな男、もしくは女をバイセクシャル。ゲイという存在は一部ではオープンにしている人もいるが、まだまだ少数派（マイノリティ）であること。千尋のような隠れゲイがけっこういること。もちろん情報収集はもっと深く掘り下げて男同士SEXの仕方、SEX必要なものは何かまで調べた。

「そ、そうか、よかったな。いい会社で。トレーナーも女なのか？」

平静を装って千尋は一樹に尋ねた。気になるトレーナーという存在のことも聞かなければ心に広がる靄は晴れない。

「いや、トレーナーは男だよ。3年先輩だって。大人しそうないい人そうだったよ。俺も体育会系だったら引いちゃったよ。」

トレーナーが男でも女でも千尋には面白くないが大人しそうな無害な男と聞いて安心した。

「そりゃ良かったな。」

心にかかった靄が少し晴れて千尋は素直に言った。一樹がノンケという事実は変えられないが、とりあえず気になった女の子がいるのだ、すぐ彼女が欲しいという気配は一樹からは感じられない。

一樹は高校くらいから女から声を掛けられることがたまにあったが断っていた。女の子という存在は好きだが同級生の女子はいつも固まっていて、なんだか近寄りがたく怖かった。一樹の周りにいる女子は大人しい子だったが、たまに毛色の違う子にも声を掛けられることがあった。一樹自信にはあまり自覚はないようだが、一樹は「癒し系アイドル」として密かなファンが多かった。

「千尋はどう？サークル何か入のか？またバスケとか？」

「いや、俺はサークルやらねえ。バイトする。」

「バイト？千尋が？」

一樹は本当に驚いたようだった。

「何で？」

と珍しく畳み掛けてくる。

「俺卒業したら家出たいからちょっと金貯めたいんだ。」

千尋は一日考えていたことを一樹に話した。

「そっか、そっか千尋も家出るか。」

一樹は心なしか寂しそうだった。高校を卒業し、進路によって家を出た同級生が何人かいた。

「俺は別に遠くに行くとか考えてねえけど、ただ家出たいだけ。」

「千尋はいつも色々考えてるな。学生なんて遊びたい放題じゃないか。」

千尋は一樹の言葉に相手からは見えないと知りながら首を振った。

「そんなことねえよ。俺は単純だぜ。したいことがあって、それをやるには金がいるってこと。単純だろ。」

「そっか、でもやっぱり考えてるよ。俺も学生には負けられないな。」

したいことは、一樹と一緒に暮らすこと。

千尋は目を閉じて心の中で一樹に言った。目を開けたら一樹が居て、

「ああ、それいいな。」

と同意してくれる。そんなことを想像した。

最後の告白

一樹は19時に待ち合わせたレストランに着いた。コジャレたイタリアンレストラン。いつもは居酒屋やダイニングバーなのに、なんだか雰囲気が違う。そう思いながら一樹はドアを開けた。

「いらっしゃいませ。」

予約した千尋の名を告げると、店員は「お待ちしておりました。」と頭を下げ、一樹を案内した。

案内されたテーブルに千尋は既にいた。一樹を見ると、手を上げる。それが様になっていて、一樹は同性ながら見惚れてしまった。

「早かったな。」

千尋は一樹が席に着くとワインのリストを見せながら嬉しそうに言った。学生の千尋はポロシャツ姿だ。千尋のラフな格好に少しほっとしたけれど、それでも大人な雰囲気を醸し出す千尋と、店の雰囲気に一樹は緊張してしまう。

「俺、こういう所慣れてなくて、ナイフとかフォークとか苦手なんだけど。」

一樹は店の人に気付かれないようこっそり千尋に言った。

「俺だって慣れてるわけじゃねえよ。でもたまにはいいだろう。成人したら一回こういうところ行って見たかった。」

一樹はワインリストを見ても良くわからなく、目が泳いでしまう。

「ワイン、決まったか？ワインじゃなくてもあるけど。」

千尋はもう既に決めているようなので、一樹も決めた。白の一番安いグラスワイン。

「メニューどうする？コースでもいいし、選んでもいいし。」

千尋は給仕にワインを頼んだ後、食事のメニューを見ながら一樹に聞いた。一樹は一皿一皿の値段の高さに驚きつつ、メニューをパラパラみて、首をかしげた。

「決められねえ？」

千尋は笑いながら一樹からメニューを取り上げた。今日の千尋はいつもと雰囲気が違う。一樹はそう思いながら、メニューを見る千尋を見る。なんとなく、男前ぶりが全開になっている。

「実はさ、一樹。」

千尋はメニューを見ていた視線を一樹に移す。まっすぐに一樹を見る。

「俺、一樹の事ずっと好きだった。」

一樹はあまりに急な展開で固まってしまう。ワインやメニュー、店の雰囲気というものが吹っ飛んだ。人間あまりに驚くと何も言えなくなるんだ。行動が止まるんだ。一樹は固まりつつもそんなことを思った。

「気持ち悪い？」

千尋は少し傷ついたような顔で一樹を見た。給仕が来て、お互いのワイングラスにワインを注いで去った。

「何か言えよ。」

千尋はワイングラスを持って、ワインを飲んだ。

「ずっと、もう幼稚園ぐらいの頃から意識してたぜ、一樹のこと。」

千尋は固まっている一樹を見て、ため息をついた。

「好きだったって言ったけど、過去形じゃない。」

給仕がメニューを聞きに来たので、千尋は会話を切った。固まっている一樹の分も適当にオーダーした。お勧めのパスタがジェノヴェーゼとのことで、そのパスタをオーダーし、タコのマリネもオーダーした。給仕が去ったのを確認し、千尋は言葉を続けた。

「今でも、一樹のこと好きだ。」

そう言って、一樹の目の前で手を振った。一樹ははっとして千尋を見る。でもなぜか恥ずかしくて、千尋を顔をまともに見られなかった。

「一樹が、一樹が俺をどう思っているとか、気になるけど、それ考えてたらいつまで経っても俺の想いは伝わらないし、俺ももやもやすんのもう嫌だし、はっきり言った方がすっきりするから。」

千尋はワインをもう一口飲んだ。

「一樹にとって、迷惑かもって思ったこともあったけど、告白して玉砕してもいいかなって思ってたさ。」

何もアクションを起こさない一樹を前に千尋は告白を続ける。

「俺、一樹に振られたら、すっぱり一樹を諦める。すぐについていうのは自信ねえけど。」

千尋はワインを一気に飲んだ。タイミングよく給仕がタコのマリネを持ってきて、ワインをどうするか聞いてきたので、千尋は同じワインをオーダーした。

「千尋。」

一樹は掠れた声で千尋を呼んだ。

「ん？」

「俺、」

給仕が千尋がオーダーしたワインを持って来た。そして静かにグラスに注いだ。千尋がワインを再び口にしたので、一樹もつられてワインを飲む。よく冷えてて、口当たりのいいワインだった。

「俺、たぶん。」

一樹は混乱して言葉を上手くまとめられない。言いたいことは頭の中にたくさんあるのに、千尋との過去の関わりや今の関わりが縦横無尽に頭の中を駆け巡る。それでも一樹は言葉を出した。

「OKしちゃう。」

一樹の言葉に千尋が固まった。

会計したのは覚えている。しかしレストランを出てなぜ、今いる公園に来たか、千尋はよく覚えていなかった。ところどころ控えめな照明がある夜の公園には、カップルや犬の散歩をする人、ウォーキングをする人などがいた。

「一樹。」

千尋は一樹を呼んだ。一樹は「ん？」と言って千尋に応えた。お互い変に緊張して言葉を紡げず、顔も見られない。千尋は横に歩く一樹の頭を見た。頭の中央にある小さなつむじが白く光って見えた。

「キスしていい？」

千尋の言葉に一樹は止まった。千尋が一步遅れた一樹を見ると、一樹は真っ赤になって、手を口を覆っている。

「それ、かわいすぎるから止めろよ。今誰もいないから、な。」

千尋はチャンスとばかりに捨て身で畳み掛ける。一樹は押しに弱い。千尋が一樹の口を抑えて

いる一樹の手をそっと外す。そして、すっと触れるか触れないか位のソフトタッチのキスを一樹にした。一樹は真っ赤になって俯いた。

「やべえ。止まらねえ。」

暴走しそうな己を抑えるのに千尋は必死だ。

「もう1回いい？」

千尋の要求に一樹は真っ赤になって頷いて応える。さっきより少し長いキス。人の気配にすぐに離れた。その行為を惜しむように一樹はそっと、千尋の上着を掴んだ。

「ん？」

「ずっと言えなかったけど、俺、」

上着を掴む手を離し、一樹が千尋の手を握る。一樹にしては積極的な行動に千尋は驚く。それでも少し暖かくて、指先だけ冷たい一樹の手を握る。もう人目は気にならなくなった。

「千尋のこと、」

一樹は顔がますます赤くなった。

「好きで好きで好きです。」

言い切って、一樹は「はずかしー」と言って、千尋の手を離し自分の手で自らを仰いだ。

「一樹。」

「いや、なんか千尋の告白に便乗っていうのも失礼だけど、俺、実は千尋にずっと憧れてたんだ。千尋は小さいころからかっこいいし、言いたいことははっきり言うし、スポーツもできるし、俺にとって、すごい自慢の幼なじみって思っていたんだけど、」

千尋の手を握る一樹の手に力が入った。

「でもさっきの千尋の告白で目が覚めたというか、単純かもしれないけど、」

一樹は大きく息を吸った。

「俺は千尋が好き。ホントに好き。」

「友達として好きとかじゃねえよな、意味わかってるよな。」

あまりに事が上手く運びすぎて千尋は一樹に確認する。

「ん。友達としても好きだし、その、キスも、恥ずかしかったけど、嬉しかったよ。」

一樹の言葉に千尋は思わず一樹を抱きしめ、顔を一樹の肩にうずめた。

「ありがとう。」

千尋は涙が出そうだった。もう諦めてもいいと思ったこの想いを一樹は受け止めてくれた上に返してくれた。それだけで幸せだった。

「一樹、俺な、来月家を出るんだ。すぐに一緒には無理かもしれねえけど、いつか一緒に暮らそうな。」

一樹は頷いてくれた。自分よりも一回り小さな体を千尋は力を込めて抱いた。いつまでもこの腕の中にいるよう、逃げ出してしまわないよう。

【完】